

## チリ地震津波来襲時の人間行動

首藤 伸夫\*

### 1. はじめに

1960 年チリ津波は、前触れとなる地震を体感しないのに来襲した。1933 年昭和三陸大津波ののち「地震があれば津波の用心」という標語を刻んだ記念碑が多数建てられていた三陸地方では、まったく思いもかけない不意打ちとなった。また、近地津波に比べて周期が長いと、これまで津波に対しては安全とされていた場所で被害が大きくなった。

日本沿岸へのチリ津波到達は 5 月 24 日の朝 3 時ころで、都市部ではまだ就寝中の人が多い時刻である。ただし、浜ではもう作業に取りかかっていた漁師も居り、こうした人が気づいて警報を発した場所もある。気象庁の警報はこれよりも遅く、すでに来襲最中に出されると言う結果となった。

遠地津波としてのチリ津波は、押し引きの周期が長く、それを甘く見て、貝取りなどの危険な行為に飛び込んで行った人も、方々で見られたのであった。

日本沿岸の人々がどのように反応したのかを、当時の新聞記事などから探るのが本稿の主目的である。

また、ハワイ・ヒロでは、警報が出されたにも関わらず、来襲が真夜中と云うことも影響したのか必ずしも避難に結びつかなかった。これは何が原因なのかを知るため、アンケート調査が行われている。調査結果の要約を気象庁技術報告第 8 号より引用し、当時の人間行動を明らかにする。

### 2. 第 1 波到達時刻、津波情報発表時刻と最大津波高発生時刻

日本太平洋岸各地における第 1 波到達時刻を気象庁驗潮記録によりまとめたものは図 1 のようになっている。原図 (気象庁, 1961) は、これと気象庁の津波警報発令時刻とを比較したものであるが、この後者を最大全振幅発生時刻と入れ換えて示した。全振幅発生時刻も驗潮記録に従ったもので、表にまとめられているものを利用した (気象庁, 1961)。

到達時刻は、その波の影響で水位が天文潮から離れはじめた時刻である。このことは気象庁技術報告第 8 号のチリ地震津波資料集から確認した。ただ、若干の違いはある。たとえば、宮古であるが、第 1 波到達時刻は技術報告では 2 時 46 分となっている。また、八戸では、原記録に港湾内副振動も重なっており、見様によっては引きから始まったと云えなくもない記録である。

ところで、被害の観点からは、最大全振幅よりも津波時に生じた最高水位が問題である。この観点から、岩手、宮城両県に関して聞き込みや驗潮記録をもとに取りまとめたのが表 1 である (福井, 1961)。

ここで、ゴシック文字は最高水位発生時刻で、そうでない時刻は最高水位に匹敵するような大きな水位の発生時刻である。

いずれにしても、第 1 波が大きいのではなく、第 3 波位が被害に結びつく最高のものであったから、気象庁の津波警報が発令されなくとも、短くても 1 時間程度の余裕があり得たのである。ただし、早朝の事であるから気づくのが遅れたり、地震がないため津波とは思わなかったりと、判断と行動に様々な差が生ずる事となった。

また、沿岸には天文潮に加えて、他の原因

\* 日本大学大学院 総合科学研究科

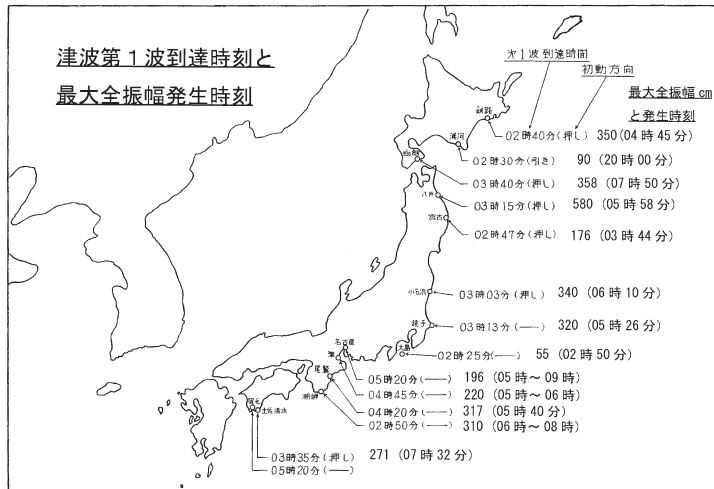


図 1 チリ津波第 1 波到達時刻と最大全振幅発生時刻

による波が存在する。気象的な原因では波浪の他に、低気圧通過によって生ずる長周期の副振動などがあり、海に生活する者にとっては、ある程度それぞれの特徴が知られている。全国的な気象条件はわからないが、良くまとまったものとして、当時の岩手県宮古市周辺の状況は三陸津波誌の巻頭次のように示されている。

これにより判断すると、当日朝、宮古湾では波浪も小さく、気象原因の副振動もほとんどない海況のところへ津波が襲来したと考えて良いであろう。

津波情報発表は、いずれの地点でも第 1 波到達後になってしまった。

最初の津波情報第 1 報は、5 月 24 日午前 5 時 20 分に気象庁観測部より

「23 日午前 4 時ごろチリ中部海岸におきた地震により、日本の太平洋沿岸では弱い津波があります。なお、北海道および三陸沿岸では津波の勢力が集まる関係で、相当な津波になるおそれがあります。」と発表された。

第 2 報は、午前 7 時 00 分に発表され、

「南米チリ付近の地震による津波は、目下日本の太平洋沿岸の各地に来襲中ですが、この津波は、なお数時間つづくものと思われまますので警戒して下さい。」という内容であった。

表 1 最高水位発生時刻 (福井による)  
(数 cm 程度の差で区別のつきにくいものを併記、ゴザは最大波を示す) 1) 水産庁日興丸 観測 \* 検潮記録 他は聴取

田老		7時10分
*宮古	3時25分	4時30分
船越		4時40分~50分
1)大槌	湾口	4時45分
*釜石		4時35分 5時15~30分
東水	道	5時30分
(高田・気)		
(仙沼間)		
*気仙沼		5時30分~6時 7時20~40分
浪板		7時
指浜		7時
尾浦		7時33分~45分
*女川		4時50分 7時40分
*站川		5時55分 6時40分
*石巻		6時15分 6時50分
*塩釜		4時45分~5時 6時18分

表 2 宮古市周辺の気象・潮汐の状況 5 月 24 日 月齢 28.2

日出	4:13	日入	18:47	月出	3:27	月入	17:10
満潮	1:48	15:01	干潮	9:02	21:00		
天気	曇量 3.	日照	7.5.	風力	0.	湿度	92%
気温	最高 18.8°C	9時	16.7°C	最低	9.4°C		
津波襲来時刻							
第 1 波 凡そ 3 時 10 分 宮古検潮儀では 2 時 47 分							
第 2 波 凡そ 4 時 40 分~4 時 50 分の間							
第 3 波以下 24 日夕刻までに凡そ第 8 波までを数えているが、八戸検潮儀では 6 日後の 5 月 29 日夜まで 30~36 時間毎に 5 回も増大した異常波を記録している。							

ただ、この情報が沿岸各地にどのくらいの時間経過後に伝わったのか、詳細は不明である。

### 3. 現象を見ての警告と避難

海辺に住み海になれている人や、海で仕事をする漁師は、流石に海の異常に早く気づいている。こうした人々と消防団との連携で警報および避難が行われたのには、海草取りの人（青森県種市町：付-1）、ワカメ解禁日の準備中（岩手県山田町：付-2や大槌町：付-3）などの例がある。また就寝中であつたにも関わらず、ふと海の異常を察し行動したのに松島湾浦戸の例がある（付-4）。こうした人々が消防団に連絡し、消防団は地元単独の判断のもと、サイレン吹鳴や避難警報発令に踏み切つたのである。これが午前3時半頃で、明らかに気象庁発表よりかなり早い時間帯であつた。

こうした現場と測候所の情報と相違した所もでた。山田町警察派出所では、3時50分頃、住民から「津波の恐れがある」との口頭連絡があり、宮古測候所に問い合わせ、「心配ない」との回答を得て、広報活動に入った所へ、津波が来襲したのであつた（付-2）。

終夜望楼で火災監視に当たっていた消防団員が発見し、処置したのには、何らかの異常を認めたからであつた。宮古市の例（付-5）では川水が引き、係留中の漁船が横倒しになったのを認めたのであつたし、宮城県女川（付-6）では普段なら水の乗らない埋立工事の線路に水が乗り、次いで海底が見えるほど引いたことを見たからであつた。

そのほかにも、なにかしら異常を認めて行動した人達がいた。

朝の散歩が日課だつた釜石の人（付-8）、的矢湾の大工さん（付-9）、川辺で米研ぎの人（付-10）などは異常潮位がきっかけであつた。

三重県五ヶ所湾磯浦で、

「磯浦（さざら）（巡査派出所および漁業

組合長談）異常現象発見から警報発表までをみると、（イ）埋め立て地で地層が荒く、3時ごろに水道の水の流れ出るような音がしたので、水道を調べたが異常なく、家のまわりで水の吹き上げるように感じた。この時地下に浸透していた水が、干潮に伴い地層のすき間から流れ出たものと思われる。

（ロ）3時30分ごろ押し寄せた波のため地下から噴水のごとく水が吹き上がった。

（ハ）4時ごろ漁業組合で津波の有線放送をした。」（気象庁技術報告第8号、184-185）となつたのは、かなり特殊な現象が認められたからであつた。

異様な流れや潮位を感じた保安庁巡視船の警告は、尾鷲港（付-11）ではサイレンで、須崎港（付-13）では拡声器で伝えられた。

1946年南海地震津波の記憶が残る地域では、異常な海鳴りに気づき、それが海を注視するきっかけとなり、避難に結びついたこともある（付-12、付-14）。

### 4. 警報の誤解～岩手県大船渡市の場合～

この津波で死者53名と最も多かつた大船渡市では、折角の警告が必ずしも有効とは云えなかつた。チリ津波で被害の大きかつたのは湾奥の大船渡町、中赤崎地区であつた。大船渡町は昭和三陸大津波ではわずか2.4mの津波高であつたが、今回は5.2mと大きく、中赤崎地区もほぼ同様であつた。

死亡者に関しても、昭和8年の141名の犠牲者のほとんどが湾口に近い地域に発生しているのに対し、チリ津波では53名全員が、安全地帯とされていた湾奥に位置する市の中心商業地帯で発生したのであつた。

「・・・二十四日午前四時二十分ごろ、市民は異常になり響くサイレンに安らかな眠りを破られた。魚市場の職員及川永さん（42）が魚市場前の岸壁で海底の見えるほど引いた海水に“すわ津波”と市場のサイレンを吹鳴、間もなく小野田セメントのサイレンもけたたましく鳴り渡り、市民に急を告げた。及川さんの話によると午前四時二十分ごろ、第

一回目の津波が押し寄せ、このときは大したことがなかったが、二回目は高さ四メートルほどの荒ら波が厚い壁になってグングン押し寄せ、あっという間に岸壁にぶつかり、市民は命からがら逃げた。延長四キロの大船渡湾にあふれた海水は情け容赦もなく低地から低地を選んで流れこみ、一瞬のうちに町なみをなめつくした。はじめはサイレンを火事ぐらいにしか思っていなかった大船渡町内の人たちはゴーゴーという海鳴りに寝ぼけまなこで飛び起きたときには、はや海水は床下にまではいり込み、家財道具一つ持ち出すこともできなかった。」岩手日報、昭和 35 年 5 月 25 日 [7]。

この辺の事情を、大船渡市では次のようにまとめている。

## 「2. 避難の現況と問題点

.....

- (A) 大船渡地区
- (イ) 前例、経験、予想を越えた津波であった。
- (ロ) 本地区は、昭和 16 年の大火後都市区画整理がなされ、以来、急速に発展した街であり、従って転入者が多く、津波の経験の無いものが多かった。
- (ハ) 気象関係庁からの事前警報が全くなく、住民は判断に困惑し、且つ避難時期を逸した。
- (ニ) 一応安全地帯と見られていた地区であり、毎年行われる津波避難訓練は、極めて消極的であったが、この地帯こそ最大の波高を見た。
- (ホ) 市役所及び市消防本部は災害地の海岸より 3km の遠隔地である盛町にあり、当直員が津波来襲の危険を察知することができず、為に避難命令及びこれに関連する措置は、地元消防団の判断により個々に発令する結果となった。
- (ヘ) 本地区は、(ニ) の項で述べた如く、いわば新開地的な商業地域であり、したがって夜間営業が多く、平常朝の起床が遅い。

(ト) 津波来襲警報として、先ず魚市場のサイレンが吹鳴され、続いて小野田セメントのサイレンと各地区の消防分団のサイレンが吹鳴されたが、火災と誤認し、又は第一吹鳴の魚市場のサイレンを、魚類水揚のサイレンと誤認し、避難をしなかった。

(チ) サイレンの吹鳴は、近火信号と津波避難信号とが同一の、3 秒吹鳴し 2 秒中断の連続吹鳴であり、又、火災出動と、応援出動及び津波警報の信号が同一 (5 秒吹鳴、6 秒中断の連続) であり、その判断がむずかしく、住民が困惑した。

又サイレンには『余いん防止装置』がなく、完全に区切って吹鳴することが困難である。

- (リ) 消防車その他に拡声装置がなく、津波来襲の情報を報知できなかった。
- (ヌ) 台町以北は、街の背後が鉄道であり、高台に通ずる避難道路がなく、又赤沢地区では、避難のためには、いったん鉄道に登り、更に又低い田畑に下り、次に高台に避難するというコースをたどるため、避難がむずかしく、多くの犠牲者を出している。」(大船渡誌、1960)。

こうしたサイレンの意味が一般市民には正しく理解されなかったのは、後に述べるハワイでも生じている。

## 5. 浜に近づく行動

### 5-1 津波とは意識しない貝拾いで遭難

あちこちで貝拾いの状況が見られたが、特に津波を意識しなかったものとして

北海道・根室では、

「温根沼海岸の状況については (浜中漁業共同組合談)、この地方は遠浅のため、大潮のときに海岸線が約 150m 変化するが 24 日午前はそれが 200m 以上になった。この朝 7 時ごろ津波を知らない人が引潮時に沖へ出て、



貝を掘っているうち津波が来て帰れず水死した」(気象庁技術報告第8号, 51)。午前7時頃だから、津波情報第1報が既に出された後の事というのがある。

おなじく、北海道広尾でも、

「津波にさらわれた老女の死体あがる

《広尾》二十五日午後一時ころ、広尾町オナオベツは間に老女の死体が打ちあげられているのをコンブ拾いをしていた同町音調津白幡吉春さん(43)が見つけた。広尾署で検視の結果、二十四日未明広尾港内でノリ採り中津波にさらわれ行方不明になった同町東通り五丁目無職田尾モトさん(52)とわかった。」(北海道新聞, 昭和35年5月26日[11])。

また、北海道・鶴川でも

「・・・4時ごろに急激に引き潮がみとめられ、最大(4時半)のもので波打ちぎわより、300mぐらい沖まで引いた(これらの引波は4分おきぐらいに反復していた)。潮の増し方は大したことがなく、普通よりちよつと多いと思われる程度であった。異常な津波は認められず、退水距離100m程度のものが30～40分おきにくり返された。

・・・鶴川町入鹿別川の川尻において魚つりの町民(61才)が引き潮時魚貝類を拾っていたが、後方からの波に逃げおくれ行方不明となった。」(気象庁技術報告第8号, 92)のような事故が発生した。

宮城県鮎川でも

「鮎川 被害は家屋床上浸水39戸、床下浸水76戸であった。潮が最も引いた時間は、8時30分ごろで、水面から底まで330cmであった(6月11日13時26分測定)。潮の最も引いた時、魚取りをした中学生1人が水死した。」(気象庁技術報告第8号, 138)。

福島県勿来市九面では、

「勿来漁業組合および付近の漁夫から聞いた話を総合すると、下記のとおりである。

4時30分ごろの第2波が大きく引き、港の底は3分の1露出した。5時10分ごろになって津波と判断し、半鐘を鳴らし、漁民の注意をうながす。その時の津波の高さは2.5~3mで一番大きく感じた。

護岸決壊は5時20分ごろで、潮の引いた時である。松川磯で、5時10分わかめ採り中、上げ潮でのまれ、1名死亡した。」(気象庁技術報告第8号, 143)となったが、これは津波に気づいていなかった可能性がある。

## 5-2 津波と知りながらの貝拾い

典型的なものに岩手県山田町の例がある。

「日東捕鯨会社の若い従業員達は、この静かに遠く引く干潮を眺め、おだやかに襲来する津波にすっかり気を緩し、再び引き潮がゆるやかに遠退き日東捕鯨の棧橋の先端より更に沖合の『雨降り島』と言われる普通約1丈位の深さ(約3米)の暗礁が完全に露出し海底が一面に干上がった。

その広い浅瀬には、あいなめ、かれい、かじか、そい等が、バタバタしている。ウニ、ナマコ、アワビ、ほっき等がゴロゴロ群をなしている奇観を見て、これはよい獲物とばかり、濡れ手に粟と、その遠退き干上がった浅瀬によこだかごをもって行き獲物をそれに一杯拾い入れ得意になってヨイショ、ヨイショとひっさげて岸に向かって引上げようとすると、静かなる津波は、急がずさわがず、ゆっくり『ノッコリ』と大牙を陸にむけ乍ら襲来しかかった。若者達は、スワー大事と獲物のよこだも何もかもあったものでない命カラガラ川流失損壊と獲物どころのさわぎでなく肌着一枚も持たさず着のみ着のまま辛うじて逃れ、エライ憂目を見た。」(山田町津波誌, 463-464)。

「当時第十分団長 千代川堅次(大沢)60歳

・・・

海は二十間位沖まで凄い速さで潮が引き、おしてくる時は人間が走る位のゆるやかさで何度も満干を繰り返していた。潮の引き方が速いものだから、魚がとり残されてあっちにもこっちにも魚がバタバタしていた。それを籠や、よこだを持って拾いに出る度胸のよい人達を止めようと分団員は見張りとか叱りかけまわらなければならなかった。そうしているうち、ごう、ごうという音と共に潮が引き、

不気味な程遠く迄海底がさらけ出された。村全体が息をのむ魔のときであった。」(山田町津波誌, 499)。

また

三重県鳥羽市でも

「鳥羽市鏡浦町 本浦町から相差町池尻湾まで……その間、押し引きの差が約 400cm あって、いままで見たことのない岩を見いだした。退水直後は魚や貝がたくさん取れた。魚は浅水と中水との間にいるいか・たこ・かれの類が、海草にまきつけられていた。最初はこの津波をこわがっていたが、3回、4回と回を重ねるにしたがって、退水時に魚貝を取るのを楽しみにしている人さえあった。退水速度がゆるいと次の襲来が大きく、退水速度が速いと次の襲来がそうたいしたことがないと思った。」(気象庁技術報告第 8 号, 180)。

こうした行動は全国各地で見られた。そのいくつかを以下に示す。

北海道厚岸本町

「最大の引きはこの付近で 200~300m, 周期は 20~30 分であった。当時遠浅となったので多数の人が貝拾いをしているところからみてこの周期はだいたい誤りないと考えられる。」(気象庁技術報告第 8 号, 71)。

青森市

「……12 時 22 分水位は最低となり、堤川護岸防波堤の捨石が露出し、付近の人が多数手づかみで魚・かに・こんぶを採っていた。」(気象庁技術報告第 8 号, 147)。

宮城県志津川では、

「所長：津波の前は、志津川湾の潮が引いて、底が見えたそうですね。

作：うそか本当かわかりませんが、アワビを採っていた人がいたそうです。

所長：その人たちは、波にのみこまれたのでしょうか。

作：いいえ、逃げたそうです(笑)」(チリ地震津波と気仙沼保健所, 平成 10 年)。

石巻港

「石巻港 潮が引いたとき川底で遊んだり、魚を取ったりしている光景が見られたが、これは非常に危険である。」(気象庁技術報告第 8 号, 139)。

塩釜市では、

「七ヶ浜町花淵……潮が大きく引いたときは、港内の海底が露出し、貝取りなどやっていた者がおり、その後に潮がきたので、あわてて逃げ出したとかで、潮が引いてから上げるまでは、かなりの時間であったという。」(気象庁技術報告第 8 号, 140)。

三重県の矢湾

「(ii) 的矢湾・伊雑浦, およびその沿岸 的矢湾 24 日 4 時 40 分ごろ第 1 波来襲……それから 30 分間ぐらいの間隔で、潮の昇降があつて、最干潮時の 9 時 20 分ごろには平均潮位から 180cm ぐらい潮が引き、いつも現われたことのない海底が、岸から 20m ぐらい沖まで見え、逃げおくれたたこ・いかおよび魚類を手で取ることができた。」(気象庁技術報告第 8 号, 181)。

淡路島福良湾沿岸

「大干潮： 第 4 波以後は、干潮の大きいのが目だった。10 時 40 分, 11 時 30 分, 12 時 30 分ごろの 3 回が特に大きく、大潮時にも現われない海底が見えた。それで時ならぬ潮干狩り風景が見られた。貝を堀る時間は 15~20 分ぐらいで、特に 11 時 30 分ごろの引き潮は大きく、このころの満潮時で 3 ひろぐらいの沖合まで潮が引いた。」(気象庁技術報告第 8 号, 196)。

## 6. 死につながる行動

### 6-1 立ち戻り

昔から繰り返される事であるが、いったん避難しながらも又立ち戻り、遭難する例が後を断たない。

岩手県大船渡市では、

「あるお婆さんなどは、一度、波に追われながらも避難して助かったのだけれども、仏壇の中の忘れ物を取りに戻ったところを次の寄せ波に飲み込まれ、家ごと沖に流されて、自

分も溺死しておりましたよ。」(気仙医師会史, 153)。

岩手県陸前高田市三日市両替でも

「・・・山沿いに歩き始めました。そうしたら消防団から『2人死んだぞ。早く来てくれ!』と言う声が聞こえてくるんです。急いでもとの役場の裏の山づたいに行ってみました。そうしたら、1回引いた波の合い間に避難場所を抜け出して、家の中に何か物を取りに行った夫婦と子供1人の3人が、次に寄せた波に吞まれたのです。夫婦は天井の間に挟まれて2人圧死してしまい、18～19歳の男の子は天井裏の屋根を破って這い上がり、助けられていました。」(気仙医師会史, 164)。

もともと、立ち戻っても助かった人も居る。大船渡市佐野のことだが、

「第一波は私が孫を抱いて逃げた後の我家に直ぐに襲いかかりましたが、たちまち庭を泥海にして家の土台を浸し内庭まではいました。道路をへだてた隣家が軒近くまで浸水するのを見て、もう自分の家もだめだ、と思いましたが、まもなく引きはじめました。水の引いた時を見計らって急いで家にもどり寝巻姿を服に着換えましたが、その時、庭の玄関先に死体が一体転がっていました。まもなく第二波がやってきましたので何もかも考えるひまがありませんでした。第一波と第二波の間が何分位だったかもはっきりしませんが、あの夢中だった私の頭の中では10分位だったように思います。」(気仙地区調査委員会, 三陸津波誌, 117)。

## 6-2 津波見物

津波見物に出かけた人は多い。どこでも津波見物でわざわざ危険に立ち寄る人がある。

「(須崎) 24日未明、須崎市はあつという間におそろしい悪夢に襲われた。午前5時から同10時ごろにかけて前後大小十回にわたる高潮に見舞われた市民は、一瞬の間の恐怖にぼう然の体だった。

恐怖と好奇心の入りまじった人々は高潮をみようとして続々防潮堤付近につめかけた。潮の足はまるで海全体が巨大なスクリーンをつけ

たようなおそろしいはやさでうなりを生じながら満ちてくる。」(高知新聞, 昭和35年5月24日(3))。

しかし、いつでも逃げきれるとは限らない。岩手県陸前高田市では津波に近づいて死亡した人が出た。

「それから、蒲生さんという人ですが、あの人も、わざわざ津波を見に行き、松の木に登ったところを波に襲われ、倒されて、亡くなった人なんです。結婚して間もなく、子供が生まれたばかりで、まだ若い年頃でしたので、非常にお気の毒でした。」(気仙医師会史, 161)。

ハワイでも調査対象となった327名中、14名が見物に出かけていた。日本でも、上の2例以外にもっと多かったのではなかろうか。

## 7. ハワイでの人間行動

これについては気象庁技術報告第8号にまとめて紹介されているので、その全文を引用する。

### 「6.2 ハワイの津波について」

今回のチリ地震津波によりハワイのヒロ市では61名の死亡者を生じたが、津波警報が発令されていたのに、なぜかくも多量の死者を生じたか。その原因を調べ今後の対策などに資するためにハワイ科学アカデミーでは調査団を組織し被災者を個々に調査した資料

(1)があるが、その結果は、わが国の遠地津波に対する警報や情報を発表する場合にも大いに参考になると思われるのでその要点を紹介する。

調査は1)津波警報の末端ではどうしたか、2)災害に会った人間の行動はどうだったかの2点に重点を置いて行なわれた。調査はあらかじめ調査表を作成し、調査員が個々の人に面接して、表の項目を説明しながら行なわれた。面接した人々は災害地に住んでいた代表的な人々327名であった(表3)。

津波警報はサイレン・ラジオ・テレビにより放送された。調査された327名のうち309名が20時35分にサイレンを聞き18名が聞

いていない。後者は映画を見ていたか熟睡していた。サイレンを聞いた人のうち 127 名は避難し 182 名は避難しなかった。サイレンを聞いた人のうち 18 名が何のためのサイレンであるか知らなかった。しかし残りの 291 名といえどもその解釈がちがっていた。警戒、警報避難信号、避難の前の待機信号・後報を待ての信号、用心せよの信号、その他いろいろ異なる意味に取っている (表 4)。これはサイレンの公式の意味が、単なる警報であって、人がそれを聞いたときになすべき行動についてはなにも指示していないことによるものであって、これを聞いても何もしなかった人が 44 名、避難した人が 94 名、待機した人が 131 名あった (表 5)。6.2.2 表を見るとサイレンの意味を正しく取った 84 名のうち 74 名が避難している・したがって一般の人がサイレンの意味を正しく取るように訓練されていたならばずっと犠牲者は少なかったであろう。

サイレンを聞いても何もしなかった 44 名の人々のうち 29 名は自分は安全であると信じていた人で、残りの 15 名は映画を見たり、病人・老人あるいは疲労し過ぎた人々であった。

131 人のサイレンを聞いて待機した人のうち 60 名は次のサイレン信号を待ち、18 名はラジオかテレビによる詳しい情報を待ち、また 18 名は避難の車や、役人が回って来て避難の時を知らせに来るのを、あるいは近所の人を避難するかどうかを見るために待機した。36 人はまだ自分が安全だと思い、また 20 名は古い警報組織がまだ生きていたと思った。

これらの結果からわかることは現在のサイレン組織は検討しなおす必要がある。すなわち、サイレンを聞いたら適当な行動を起こすよう公衆を訓練する必要がある。そして教育運動を活発に起こすことはたしかに重要であるが、しかしラジオ・テレビなどを持たない人も多くいるから、サイレン一本で警報を知らせ、後は全くラジオ・テレビにまかせてしまうことは問題である。

サイレン以外よりも津波の情報を得ている

人が 261 名いる。そのうち 206 名がラジオとテレビから情報を得ている。その他は友人や役人から得ている (表 6)。

なぜ信号にしたがって行動したり、しなかったりするののかについては信号の内容がいまいのためで、個人個人で判断せざるを得なかったからだ。ラジオ・テレビの中ではただ一つの包括的な権威ある情報源が必要であるように見える。

34 人の英話を解しない人がいた。そのうち 7 名だけが避難した。英語を解するもの 293 名のうち避難したものは 123 名で前者よりも比率が高い。

23 日午前 1 時 5 分 (ハワイ時間) に第 3 波の大波がヒロ市の低地に流れ込んだ。このとき 85 名が家で寝ていた。また、95 名は家で起きていた。寝ていたうちの 26 名と起きていたうちの 11 名は警報サイレンが鳴ったときに何もしなかった人達である。寝ていたうちの 30 名と、起きていた人々のうちの 61 名が警報サイレンが鳴ってから待機していた人々である。これは彼らが状況が重大であると判断し、おそくまで起きていることを当然と考えていたのであるから、この期間こそ、ラジオ・テレビで、あるいは家ごとに警官が回って断固として避難をすすめて行なわせるときである。

14 人が津波を見物していたというが、これは警察が強く禁止しなければならない。

逃げなかった 197 名のうち 112 名が漂着物の中におり 47 名が負傷した。この数字は津波警報中は完全に避難することが必要であることを示している。そしてヒロに津波が来れば、危険地域に残っている人の半分が破壊物の中に埋まり、1/4 が負傷するか死亡することを示している。

## 参考文献

- (1) William J. Bonk et al (1960) : A Report of Human Behaviour during the Tsunami of May 23, 1960. Hawaii Division of the Hawaiian Academy of Science, Hilo.

表3 調査の対象となった人

種 別	総 数	計 %	避難せざる人 数	%	避難した人 数	%
性 別						
男	140	42.8	88	44.7	52	40.0
女	187	57.2	169	55.3	78	60.0
年 令						
18~27	59	18.0	29	14.7	30	23.1
28~37	76	23.2	41	20.8	35	26.9
38~47	77	23.5	45	22.8	32	24.6
48~57	64	19.6	45	22.8	19	14.6
58~67	33	10.1	25	12.7	8	6.2
68以上	18	5.5	12	6.1	6	4.6
人 種						
コ ー カ サ ス	8	2.4	3	1.5	5	3.8
フ ィ リ ピ	33	10.1	23	11.7	10	7.7
ハ イ ソ イ	74	22.6	23	11.7	51	39.2
日 本 人	178	54.4	123	62.4	55	42.3
ポ ル ト ガ ル	15	4.6	14	7.1	1	0.8
そ の 他	19	5.7	11	5.5	8	6.1
教 育						
中 学	151	46.2	100	50.8	51	39.1
高 校	152	46.4	81	41.1	71	54.6
大 学	24	7.5	16	8.1	8	6.2
地 区						
ヒ ロ シ マ ツ	46	14.1	34	17.3	12	9.2
キ ミ ビ ル	118	36.1	91	46.2	27	20.8
ソ イ ケ ア	118	36.1	65	33.0	53	40.8
ケ ア ウ カ ハ	45	13.8	7	3.6	38	29.2

\* Grade or Intermediate School

表4 サイレンの意味を何と解釈したか

項 目	総 数	計 %	避難せざる人 数	%	避難した人 数	%
警 戒	14	4.8	10	5.9	4	3.3
警 報	13	4.5	8	4.7	5	4.1
避難信号の前の待機信号	71	24.4	55	32.4	16	13.2
避 難 信 号	84	28.9	10	5.9	74	61.2
次の情報を待てる信号	26	8.9	24	14.1	2	1.7
用意せよの信号	18	6.2	12	7.1	6	5.0
不 明	65	22.3	51	30.0	14	11.6
	291	100.0	170	100.1	121	100.1

表5 サイレンを聞いて何をしたか

項 目	総 数	計 %	避難せざる人 数	%	避難した人 数	%
な に も し な い	44	15.0	40	23.3	4	3.3
避 難	94	32.0	12	7.0	82	67.2
待 機	131	44.5	100	58.1	31	25.4
そ の 他 (ラジオのスイッチを 回す、家に帰るなど)	25	8.5	20	11.6	5	4.1
	294	100.0	172	100.0	122	100.0

表6 サイレン以外何から津波警報を知ったか

情 報 源	数	%
親 類・友 人	45	17.2
ラジオ・テレビ	178	68.2
政府(警察・消防・自警団)	8	3.1
ラジオ・テレビ・親類・友人	22	8.4
ラジオ・テレビ・政府	6	2.3
親類・友人・政府	1	0.4
答 な し	1	0.4
計	261	100.0



表 7 誰が君を漂流物の中から引き上げたか

助けてくれた人	数	%
自 分 で	48	40.7
家 族 や 友 人	26	22.0
他 人	9	7.6
消 防 手 ・ 警 官	28	23.7
知 ら な い	5	4.2
答 な し	2	1.7
計	118	99.9

表 8 いつ漂流物から引き上げられたか

いつ助けられたか	人数	%
1.05 a.m.~1.59 a.m.	52	44.1
2.00 2.59	26	22.0
3.00 3.59	16	13.6
4.00 4.59	6	5.1
5.00 5.59	8	6.8
6.00 6.59	1	0.8
7.00 7.59	1	0.8
8.00 以後	3	2.5
答 な し	5	4.2
計	118	99.9

\* 調査: 気象庁地震課 広野卓蔵] (気象庁技術報告第 8 号, 243 ~ 246)。

## 8. おわりに

いろいろな意味で、日本にとっては不意でつかれた津波であった。前触れとなる地震がなかった。また、大船渡湾奥の、近地津波に対して安全な所が思いがけなく大被害となった。警報は津波が猛威を振るい始めた後になって出された。

しかし、海に生きる人の注意が警告を発する事につながった場所があちこちに見られた。ところが、異常な引潮に注意せずに遭難した人があるにもかかわらず、周期が長いことを見くびってわざわざ貝取りなどの危険な行為に出た人が、これまた各地でかなり多かったのも事実である。

襲来が真夜中であったハワイでは、流石に貝拾いなどはなかったようであるが、津波警報が出ていたにも関わらず、避難しないどころか、津波見物に出かけた人もあった。

日本でも津波見物はあちこちであった模様

であり、そのため命を失った例も出た。

日米に共通だったのは、避難などを知らせるためのサイレンの意味が知られていなかったことである。したがって、サイレンによる警告が必ずしも避難に結びついてはいない。

津波浸水時に自宅に立ち戻つての遭難もあった。これも他の近地津波の場合にも見られるものであるが、特にチリ津波は、一旦引いてから次の襲来までの時間が長かったからなんとかなんとと楽観視されたのかも知れない。

ハワイでは、英語を解する人の避難率が、解さない人に比べ高かった。観光客などへの周知の必要性を示唆しているものと考えられる。

大船渡で最大の被害を受けた地域は、近地津波にはさして被害を受けない場所で、最近急速に発展し転入者・津波未経験者が多く、避難訓練に消極的で、しかも夜間営業が多く朝の起床が遅い人の居る所であった。寝込みを襲われ、避難が遅れたとの感が強い。

これに比べ、ハワイでは、警報が出ていたのにも関わらず逃げなかった人の約半分が破壊物に埋まり、1/4 が負傷するか死亡した。

以上から、警告の重要性、警告に従った避難の必要性、無謀な行動の危険性、そしてこうしたことについての普段からの教育だけが人命を守れると云えよう。

## 引用文献

大船渡誌 (1960) : チリ地震津波災害における応急対策の現況と問題点, 15-16。

福井英夫 (1961) : チリ地震による三陸の津波, チリ地震津波記念三陸津波誌, 気仙地区調査委員会, 39。

気象庁 (1961) : 第2節 チリ地震津波速報, チリ地震津波記念三陸津波誌, 気仙地区調査委員会, 15-28。

## 付属資料

### (付-1) 青森県種市町

「八木港 海岸で24日の早朝にいく人かの地元民が海草採りに出かけて、3時半ごろ潮の引き方が異常なため、一時逃げ帰って消防団に連絡した。消防団は4時20分ごろサイレンで周知、地元民(種市・八木)が避難した。」(気象庁技術報告第8号, 125)

### (付-2) 岩手県山田町

当日はワカメの解禁日であったため、早朝から漁師が浜に出ており、潮の異常に気づいた。

「この日は、若布解禁の日で漁師たちは早朝より浜に出ていて引き潮の異常に気づいている。第一波は二時三十分ごろ、第二波は三時ごろ、そして第三波は四時二十五分過ぎ頃、海面が段々高くなってきて、見る間に護岸を突破した。この第三波は間もなく引きはじめ海岸より数百m位の沖合まで遠く干上がった。第三波は波高が最も高く、山田で三・一m、織笠で四・0m、大沢で二・七mであった。この第三波も引き、第四波までは大きな波であったが第五波以後のものは比較的大きくはなかった。

浜にいた人たちは引き潮に気づき『津波

だ!』と叫びながら大きな声で知らせ歩き、我が家にもどった。浜にいた消防団員はすぐ引き返して消防屯所の警鐘、サイレンを鳴らして大事を知らせた。魚市場のサイレンも鳴らした。午前三時三〇分、警鐘、サイレン吹鳴によって他の消防団員も出動し、消防車等により広報活動を展開し、至急高台に避難するよう連呼するとともに三時四〇分から四時にかけて田ノ浜、大浦、織笠、山田、大沢の海岸地区住民を付近の高台、学校、公民館に誘導した。

殆どの人達は漁師を中心とした隣り近所の掛け声で避難していた。一方、三時五〇分頃山田警察派出所に対して地区民から『津波のおそれがある』旨口頭で届け出があり、所員は具体的に事情を確かめ、三時五十五分頃町役場に連絡した。役場では、宮古測候所に問い合わせたが心配ないとのことであった。心配ない旨住民に伝えるため広報活動に入ったとたん津波がやって来た。派出所員高橋警部補以下四名は未だ家庭に残留していた同地区住民約一〇〇人を山田小学校に誘導した。

一部海岸地区の消防団員は海岸に部署し津波の来襲、引き潮の見張りを行い状況を逐一本部に連絡した。」(山田津波誌, 493-494)

### (付-3) 岩手県大槌町

ここでも漁師が気づいている。

#### 「津波早期発見者に聞く

この津波は、全く無警告という特殊なケースであっただけに、事件発生は、白々と夜の明け始めた頃とはいえ、全く心支度のなかった故、早期発見されなかったとするならば確かに人命にもその危害が免れなかった事が想像に難くないと思う。

この日は、当地沿岸では、ワカメの口開けとて、大須賀の漁家の人々の中には、早、午前1時、2時頃には、採藻出漁の準備などに取りかかろうと、目を醒ましていた人達もあつたらしい。

この早期発見者ともいべき岩間健治氏も、またその一人であった。氏の住宅は日頃よく上げ潮、退け潮の度毎海水の音を耳にする事

の出来る程、海辺近くにあり、丁度この早暁 2 時頃、何時になき異様の海音に心打たれ、不審を抱き早速海岸に立ち出で、海水の動静を見つむるに、常ならぬ引き潮に、ハツタと胸をつかれた。幾分か、見守るうち、まさしく津波襲来の兆と判断し、直ちに大須賀なる当町消防団副団長の内金剛氏に、その急を告ぐ、内金剛氏も、すは一大事とばかり、その言の確認を得、協力して消防署への急報とか、宮古測候所への連絡など、応急対策の第一歩を踏み出したのであった。然るに宮古測候所からの通報は、津波襲来の危報なしとのことであった。けれど海水の異様な動きは、厳として安閑を許さず、その筋からの警報未だなかったにもかかわらず、速刻、大槌町消防団としての本格的活動を促進する一面、遂に午前 3 時 40 分、当町単独警戒警報の発令を致し、4 時 20 分迄には避難区域の避難完了を見たのであった。最大波高を記録した第三波が押し寄せたのは 4 時 50 分頃であったから、早期発見や消防団員の果敢と敏速な臨機応変の処置が、尊き人命に異常なからしめた事の最大原動力をなした事が十分肯かれる所である。」(大槌町：チリ地震津波誌、昭和 36 年、1-2)。

(付 -4) 宮城県塩釜市

松島湾内の島に住み海になれている人の機転で助かった例である。

「土井さんの表彰上申 津波察知、避難させる

塩釜署では浦戸寒風沢字港、土井芳次郎さん(53)を三十日、県警本部へ表彰方を具申した。

土井さんは二十四日朝三時半ころふと目をさまし海岸のようすがいつもと違うことを知り同じ部落に住む同市浦戸支所長土見東一さんを起こし、同地区四島五部落消防団、青年会などを通じ全島民の避難警報を出した。このため浦戸地区の千九百島民に一人の死傷者も出さなかった。」(河北新報、昭和 35 年 5 月 31 日 [4])

(付 -5) 岩手県宮古市

終夜警戒にあたっていた望楼の上から川での異常を発見した例が、岩手県宮古市に見られる。

「川水の引くのを見て通報 “警報” の前に避難 宮古市消防署 白鳥さんに感謝の声  
宮古市沿岸は明治二十九年、昭和八年を上回る被害を出しながら、行くえ不明一人を出しただけですんだ。最初に津波を発見した市消防署員白鳥定男さん(21)＝写真＝の適切な措置のため、市民の感謝と称賛の的になっている。

白鳥さんは津波襲来の二十四日未明に消防署の望楼で火災の発生を監視していたところ、午前三時四十五分ごろ閉伊川川口の水が派手しく引き、係留中の漁船が川底に横倒しになったのをみて『津波の襲来』を直感した。

直ちに菊池市長と一条市消防署長に報告、指示を仰いで、避難サイレンをならすと同時に市内各消防分団員へ避難指導するよう通報した。サイレンに驚いた市民はすぐに高台に避難、約一時間後に気象台から津波警報が発令になったとき市民の避難はすでに終わっていた。

・市民は『白鳥さんの適切な措置がなかったら死傷者がたくさん出ただろう』と語り合っている。」(岩手日報、昭和 35 年 5 月 27 日 [2])。

(付 -6) 宮城県女川町

ここでも消防団員の活躍があった。こちらは海の異常に気づいている。

「救われた町民の命 女川 消防士の機転で退避

女川は津波の洗礼をうけて全町死の町と化したのが奇跡的に一人の犠牲者も出さなかった。これは消防署の監視人がいち早く津波の襲来をみつけ、津波警報に先立って町民を高台に避難させたからだ。

この消防士は女川町角浜の大槻喜蔵さん(36)。望楼で見張り午前三時五十分ごろ、たまたま津波を見つけた。ふだんの高波と違って大きくなりそうだったので大規模な津波と判断、早速当直の女川町大原、木村国男

さん（35）に連絡した。このため伝令が石巻署女川警部派出所の高清水所長に飛び間髪を入れず署員の非常招集が行われ、住民に退避命令が出された。発見してわずか二十分、県警の津波警報に先だつこと、実に一時間二十分だった。」（河北新報，昭和35年5月25日〔6〕）。

#### 「海の記念日に表彰 女川町消防団 警報より早く津波察知

県の津波警報より一時間も早く津波警報を出し、一万八千の町民の命を救った女川町消防団（鈴木庄吉団長）が、七月二十日の海の記念日に運輸大臣から表彰される。

この殊勲者は常備消防の望楼勤務者大槻喜蔵さん（36）。二十四日の朝三時四十分ころ、望楼で海をみていたところ、ふだんなら水のらない埋立工事の線路に潮が押し寄せているのを見つけた。この潮はまもなく引いたが、湾の底がみえるほどの異常な引きかただったという。このため津波襲来と判断、通信勤務者の木村国男さんに連絡、木村さんはすぐ班長の高橋徳松さん（53）に連絡した。しかし高橋さんは地震もなかっただけに判断に迷い、常備消防部長の高橋勝雄さん（54）の処置を待った。同部長は状況をきいてこのままでは危ないと直感、朝四時十五分、津波警報と同時に町民に避難命令を発した。五時を越す大波がやってきたのはそれから十分後の四時二十五分だった。津波はその後午後二時十三分まで十波も襲い、第六波の七時十三分には五時四十五分の大波が押しよせたが、奇跡的に一人の死者もケガ人も出さなかった。鈴木団長が東京出張で不在のため副団長の斉藤春雄さん（53）が総括指揮を行い、再度の津波で望楼が水中に孤立したにもかかわらず、常備消防十六人は交代で五時間余、懸命に半鐘を打ち鳴らした。

また二台の広報車を飛ばし警察と協力して町民の救出に努めた。水中に孤立した十数人がこの車で助け出されたという。大槻さんの発見と高橋部長の判断がなければ町民は完全に寝込みを襲われるところだった。

高橋部長の話 大臣表彰は光栄です。これ

も大槻君以下の一条乱れぬ連絡が功を奏したものだと思います。こんごも町民のために大いに努力したいと思っています。」（河北新報，昭和35年6月22日〔7〕）。

#### （付-7）宮城県牡鹿町

牡鹿町でも、誰が発見・判断・行動したかは記載されていないが、素早い警戒と退避が行われている。サイレンを鳴らしているのです、おそらく消防団関係者であろう

「桃浦 第1波不詳，第2波5時30分，第4波6時8分，第5波は6時30分に到着した。このうち最大は6時8分で最も引いた時は、普通の海面から5mぐらい低下したとのことである。

海面の異常な引き潮を認め、4時40分サイレンにより、警戒退避体制にはいったので、人的被害は全くなかった。」（気象庁技術報告第8号，138）。

#### （付-8）岩手県釜石市

「平田（平田漁業協同組合中山氏談）平田在住の人で病身のため、毎朝養生の目的で早起きをし、海岸を散歩していた人が、3時半ごろ潮の異常を察知して、中山氏（漁業協同組合内居住）に連絡した。3時40分に戸外に出た時は、すでに道路上に波が上った痕跡があり、漁業組合の拡声器で、直ちに部落民に急を告げた。最大波高は4時20分、漁業協同組合内には前後8回波が侵入した。」（気象庁技術報告第8号，129）

#### （付-9）三重県的矢湾

ここでは大工が異常に気づいている。

「渡鹿野（わだかの）ここは的矢湾内の小島（周囲約4km）で、島全部が遊覧観光地になっている。ここも前年の伊勢湾台風により、浸水したところであるが、今回も観光旅館のある南東部海岸の大通りは、約20cmぐらいの浸水があり、海岸通りの民家はほとんど床下浸水した。ここでは4時40分ごろ大工が異常潮位を認めて、消防分団長に通知し、5時10分ごろスピーカーで部落全体に通知し

対策をたてた。6 時過ぎに、ラジオでこれが津波であることを聞かされた、と島の農協の書記が話してくれた。」(気象庁技術報告第 8 号, 181)

(付 -10) 三重県五ヶ所湾

川辺で米を研いでいた人が気付き、警察に連絡した。

「紳津佐地域 異常現象発見から警報発表まで……,

(ハ) 村の市川つる氏が 4 時ごろ神津佐川畔で米とぎ中、潮流の異変に気づき、わずかに数分で 3 段から 8 段まで水位が上昇した (階段間隔約 1 尺ほど)。このため巡査派出所に急報した。

(二) 4 時 20 分ごろ異常潮流を放送、警戒に当たった。」(気象庁技術報告第 8 号, 184)

また

「磯浦 (さざら) (巡査派出所および漁業組合長談) 異常現象発見から警報発表までをみると、(イ) 埋め立て地で地層が荒く、3 時ごろに水道の水の流れ出るような音がしたので、水道を調べたが異常なく、家のまわりで水の吹き上げるように感じた。この時地下に浸透していた水が、干潮に伴い地層のすき間から流れ出たものと思われる。

(ロ) 3 時 30 分ごろ押し寄せた波のため地下から噴水のごとく水が吹き上がった。

(ハ) 4 時ごろ漁業組合で津波の有線放送をした。」(気象庁技術報告第 8 号, 184~185)

(付 -11) 三重県尾鷲市

「尾鷲市付近……当地方で人的被害がなかったのは、1944 年 12 月 7 日東南海地震による大津波を経験しているため、津波の恐怖感が先行して、家財道具などにわき目もくれず避難したためである。また港内に停泊中の保安庁巡視船「もがみ」が、異常潮流、すなわち第 1 回の引き波に気づきサイレンで市民に警告したこともみのがすこととはできない。」(気象庁技術報告第 8 号, 185)。

(付 -12) 和歌山県白浜

ここでは、真珠会社の当直の判断が、消防団長の決断と結びれて、家屋被害が出たものの、死傷者はなかった。これを伝える記事を事柄の発生順に見ると次のようになる。

『津波だ!』の第一声 声の主真鍋さん 東白浜町民から感謝の声

チリ津波が去って十日あまり、被災地の白浜温泉東白浜地区でもようやく着きを取戻し、水につかった家の修理や床の張りかえ等、復旧が急がれているが、着きを取戻した街の人達の間

あの朝『津波だぞ!津波が来るぞ!』と知らせて回った青年がいるが誰だったんだろう。もしあの知らせがなければもっとひどい被害と犠牲者を出していたかも知れない

という言葉が交わされる様になり、同地区の真鍋兼一さん (43) らが中心となってこの話題の主を捜していたところ、はからずもこの青年が同地区の真珠会社に勤め日頃温和しくて目立たぬ存在の真鍋学さん (22) とわかり街の人達から感謝の念がよせられている。

宿直室の窓 異様な夕騒

津波の襲った 24 日未明、風もなく海も静かに死んだ様だった。東白浜にある白浜真珠 KK に勤める学さんはこの日宿直に当たり、海に近い宿直室で寝ていたが、午前 4 時過ぎ異様な潮の騒ぎに目をさました。海を見るとかなりの早さで潮が増加している『これはただ事ではない……』と直感。近所の井土しずさん (45) 宅を起し、注意をあたえたのち自転車を借りて東白浜地区へこの異常時を知らせて廻った。

この知らせで起きた土地の元老達が海を見て『津波だ!』と騒ぎ出し、14 年前の津波で敏感となっている人達はいち早く避難態勢をとった。……」(紀伊民報, 昭和 35 年 6 月 6 日, (2))。

「死傷者なしの白浜 津波来襲 1 時間前に声をからし呼びかく 町民に避難命令 讃えられる上田団長の措置

廿四日早朝のチリ地震津波は各地に大きな被害を与え、死傷者も多数に上ったが、白浜



町東白浜でも家屋 350 戸 (2 千人) が水浸しとなったが、幸い 1 名の死傷者も出さなかった蔭に、消防団長の適切な措置があり、災害後の落ちつきと共にこれが明るみに出、町民から感謝されている。

この人は白浜町消防団長、上田進氏 (50) で、当日午前 4 時 25 分『津波が来た』と東白浜の住民から同氏に電話連絡があった。この目で確かめて - と現地にかけてつきたところ網不知の棧橋付近は高汐も相当なもので、海の動きもただごとでない。同団長の脳裡に浮かんだのは、チリーの地震。これは前日耳にしているだけに、津波来襲必至と判断し、直ちに『団員招集』のサイレンを吹鳴した。

それと共に消防マイク車で『津波が来る。危険状態だ』と瀬戸、湯崎、網不知 (東白浜) 地区に対し、同団長独断で『避難命令』を発した。

『年より、子供はすぐ避難してくれ』と声をからしてふれて廻った。同 6 時に至って気象庁から津波の情報が入ったが、既に手遅れのものであった。

第 1 波の津波が襲ったのは同時刻だが、白浜町では右のように、それまでに避難を済ましたあと。このためケガ一人なく町民からこの適切な措置を後日に至って思い出し同団長の平素からの熱心さ、適切な措置に感謝の声がよせられている。

上田団長は昭和 7 年消防団員として勤続二十九年、永年勤続者として数回表彰され、線に国家消防本部から栄えの消防功労章を授与表彰された持ち主で、津波後も対策本部で走り廻り昨日始めて自宅で食事をした - という熱心さ

△上田消防団長談 = 常備消防は栗原円也 (20) と私の二人だ。確信はあったが避難命令を出して津波が来なければ、私一人が責任を負えば……と思い栗原団員と共に発令をして回った。人命に被害がなかったことはうれしい (紀伊民報、昭和 35 年 5 月 30 日、(2))。

(付 -13) 高知県須崎市

高知県で最大の津波となった須崎市では、

巡査と消防団長の連携、また巡視船乗組員の好判断で警告が出されている。

「津波と直感、非常サイレン - 巡査のおてがら、須崎市会で明るみに

(須崎) 駐在巡査らの適切な事前処置で津波直前、いち早く出した避難警報が被害を最小限に食い止めたため地区民から感謝されている。

25 日開かれた緊急全員協議会で竹林義三議員から明らかにされたもので、市内野見で 24 日未明、湾内の異常干潮から津波の前ぶれと気付いた須崎署野見連絡所の谷正一巡査 (36) は市消防団南分団 (上田新一分団長) の東山春繁副分団長 (40) ら幹部と話し合い、法とは関係なく臨機の処理で午前 5 時サイレンを鳴らして避難するよう全地区に知らせた。このため同地区 2 百 40 戸のうちほとんど全戸の人が裏山に避難、まもなく押し寄せた 6 時過ぎの大津波にも適切な事前処置をしていたため浸水被害も最小限に食い止めることができた。

同地区は野見湾に面し“陸の孤島”といわれる辺地。14 年前の南海震災の地盤沈下から陸地は満潮水位と同じで防潮堤でやっとな免れているが、南海震災で 3 人の犠牲者を出したにがい体験を持っている。この避難警報につき笹岡 (徳) 委員は『須崎地区に警報が出たのは野見地区より 2 時間半も襲い 7 時 30 分。このため浸水地区では相当な物的被害を受けた』として災害復旧対策本部や水防本部 (本部長はいずれも市長) の責任を追及、谷、片岡両議員らも関連質問をした。これに対し上田本部長、横田次長 (助役) は処置にいかんの点があったことを認めた。

避難警報は警職法により警察署長、水防法により市長のもとでそれぞれ発令することができるが、須崎市の場合、警察側の判断で出されたもので、こんどの場合責任者である市長や助役が市街地から遠く離れたところにおいて情勢判断や処置が送れたことも指摘された。」

(高知新聞、昭和 35 年 5 月 26 日、(7))。

「いち早く拡声器で知らす 須崎港にいた

### 巡視船

須崎市を襲った津波をたまたま漁業取り締まりのため須崎港に停泊していた高知会場保安部の巡視船“おきちどり”が感知し、午前 5 時半ごろ港内の漁船や付近の民家に拡声器で知らせた。

24 日午前 4 時 45 分ごろ“おきちどり”の船尾が岸壁にぶつかって強い衝撃を感じた。満潮時間なのに潮がどんどん引いていたので、はじめは地震かと思ったが、20 分くらいしてまた引きだしたので、津波を数回経験している藤本機関長はとっさに判断し、乗組員に知らせた。はっきり津波と断定を下したのは同 5 時 20 分だったが、直ちに港内につながれている船に拡声器で警告した。またあわてふためいていた沿岸の住民も津波とわかったので、高いところを求めて避難したという。警報が 6 時すぎだから港に近い人々の避難に一役買ったわけ。」(高知新聞, 昭和 35 年 5

月 26 日, (7))。

(付 -14) 和歌山県文里

#### 「美談も調査 津波襲来下の人命救助

津波の災害下、各地で人命救助や適切な指導で多くの人たちを安全地帯へ誘導する等の美談が伝えられているが田辺署では、これらの事実を調査してその行動を讃える事になっている。

今まで明らかとなっているのは、白浜町堅田の福田藤四郎、古谷英夫さんの二人が津波で危険にさらされている同町細野の津田くにあさん(38)としおちゃん(6)の母子を救助した事や、田辺市文里にある県職業訓練所の当仲補導員が午前 5 時ごろに海鳴りを聞いて起き危険を感じて同所に寝起している 15 名の生徒をいち早く避難させるなどで、災害下に於ける美談、美事を調査している。」(紀伊民報, 昭和 35 年 5 月 26 日, (3))。